

私が通った幼稚園・保育園(9)

一学期だけの幼稚園

入江 礼子

五十年前の幼稚園児として

私が神奈川県の大磯町立大磯幼稚園に入園したのは今からおよそ五十年前の昭和三十一年(一九五六年)のことです。昭和三十一年といえば初めての幼稚園教育要領が定められた年ということになります。

子どもの足で歩いて十五分はたつぷりかかるこの園に近所の友だちと四人で通いました。当時のことゆえ当然一年保育です。私はあやめ組でした。一年保育のクラスは四組あったように記憶していますが、自分のクラスの人数が何人いたのかは全く記憶がありません。ただ二年保育のクラスが一クラスだけあって、このクラスの子ど

もたちがあちこちのクラスに神出鬼没で自由に過ごしていたということに妙にはつきりと覚えています。丁度現在の幼稚園での三歳児の位置と重なるようにも思いません。

待ち遠しかった入園

五月生まれの私は幼稚園に入園できるのをとても楽しみにしていました。近所に同い年の子どもだけでも五人いて、遊ぶことには事欠かなかったのですが、それでも幼稚園に行かれることは新しい世界が開けるように思ったのでしようか、待ち遠しくて仕方ありませんでした。

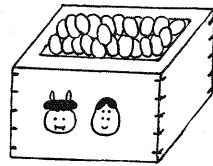
「幼稚園には歩いて行くから、雨の日に傘が一人で差せないと行かれないでしょ。傘を開いたり閉じたりが自分でできるように練習しなさいね」と母に言われ、新しい傘を渡された日のことを今でもはつきりと覚えています。当時の傘はワンタッチではありません。開けるのは

何とかなるのですが、すぼめるときにどうしても指の肉を挟んでしまい、なかなかうまくいきません。何度も練習してやつと肉を挟まないで開閉できたときは、これでやつと本当に幼稚園に行かれるのだと誇らしく思いました。もちろん幼稚園に行くのは近所の子どもたちと一緒に、現在のように親子で登園ではありません。ですから、自力で傘を差したりすぼめたりできることは幼稚園に通うための必須事項だったのです。

新しい友だち

入園式の日。その式の記憶は全くないのですが、母と一緒にの帰りがけ、たまたま近所の友だちではなく同じ「あやめ組」になったM子ちゃん母子と帰ったこと、東海道線の線路の踏み切りのところで別れたことを覚えています。クラスが一緒に帰り道が一緒、おまけにどうやら母親同士も話が合ったということもあつてか、帰りはほとんどM子ちゃんと一緒に帰るようになりました。入

園して間もないある日、私たちは二人とも母のことを「おかあちゃま」と呼んでいることに気がつきました。当時の私は近所の友だちと遊ぶ時は母のことを「お母さん」と呼び



び習わしていました。間違っても「おかあちゃま」とは言いませんでした。その呼び方が場にそぐわないことを感じ取っていました。それがM子ちゃんとの会話の中では思わず、この「おかあちゃま」という言葉が飛び出してしまったのです。それを聞いたM子ちゃんは「私もおかあちゃまって呼んでるの」といってニコツとしました。この時から私とM子ちゃんは「おかあちゃま」と心置きなく口に出して遊べる仲となりました。近所の友だちという地理的に限定された枠を出て、「気が合う」ということの意味をM子ちゃんとの出会いから学んだともいえます。それから五十年近い年月が経ちましたが、私

たちは今でも友だちでいます。

断片的な思い出

幼稚園での思い出は本当に断片的です。でも不思議なことにこの五十年間何回も思い出されることでもありました。まず砂場の場面。私は砂場で何をして遊んでいたのかは覚えていないのですが、気づくとM子ちゃんと二人だけになっていました。すると遠くの（そんなに広い園庭ではないのですが、そんな風に感じました）保育室前のコンクリートのタタキから担任のS先生が「もどつてらっしゃーい」と私たちを呼んでいます。「あつ、お集まりだ！」と私たちは急いでお部屋に向かいました。

それからどうしたのか、記憶はそこでぶつ切りと切れています。しかし、この「お集まり」という響きには自分が幼稚園にいるということを実感していたように思えます。

こんなこともありました。休み時間（というように記

憶しています)、ブランコはみんなに人気の固定遊具でした。子どもたちは保育室から走ってブランコに向かいます。そして長い行列ができます。「もう、順番だよ。」

十数えたら代わるんだよ」と誰ともなく決められたそのルールの多くの子どもたちは従っていました。私も自分の番がくるまで何回も「いち、にーい、さーん、しーい、ごーお……」と大きな声を出して数えていました。

でもF君の番になるとF君は十数え終わっても一向に降りる気配がないのです。誰かが「もう、順番だよ。十数えたのに。F君、降りてー！」と声をかけるのですが、F君は決まって「やーだよ！」という返事を返してきました。「ずるい、ずるい!!」の大合唱になっても、降りてくれません。そのうちに「お集まりですよー」の声が聞こえてきます。「あーあ、またブランコに乗れなかった」絶対に譲ってくれないF君の存在から、私は「わがまま」という言葉を知りました。それから「ずるい」という言葉とそれに伴って自分の心のなかに沸き起こったあ

る感情も。

お誕生会のゴム毬

昭和三十一年といえば、まだ高度経済成長以前の時期でもあります。当然「もの」は豊かではありませんでした。そんな時代に幼稚園のお誕生会でもらった「ピンクのゴム毬」のことを思い出すと、その時の何ともいえない誇らしさと嬉しさが蘇ってきます。お誕生児はみんなの前に出て、一人ひとり先生から紹介され、祝福されます。そして男の子には「白のゴム毬」、女の子には「ピンクのゴム毬」が手渡されました。ゴム毬は一つずつ網に入っています。それが特別のようで嬉しく、大事に大事に、これも誕生月も一緒だったM子ちゃんと一緒に持って帰りました。ソフトテニスのピンクボール版と似た大きさのこのゴム毬は、以後私の毬つきの友となります。当時の降園後の女の子の外遊びといえは毬つき、ゴムとび、大縄跳びなどが代表的なものでした。で

も「ピンクのゴム毬」を持っている人は近所にはいません。私は来る日も来る日もこの「ピンクのゴム毬」を持って外遊びに出かけました。よほど使い込んでしまったのでしょうか、ゴム毬からは段々に空気が抜け、へこむようになってきました。私は母に頼んでお湯を沸かして貰いました。そしてお湯を洗面器に入れ、そこにゴム毬を浮かべて膨らましたのです。しかしそんな努力も空しく、遂に毬つきには使えない日がやってきました。なんだか幼稚園と縁が切れてしまったような、そんな寂しさを今でも思い出すことができます。

幼稚園を中退

「幼稚園と縁が切れてしまったような」と書きました。が、実はピンクのゴム毬がペコペコに凹んでしまったその年の秋、私はもう幼稚園児ではありませんでした。その年の夏、祖母の家に泊りがけで遊びに行っていた私は午後になると熱が出るようになってしまったのです。診

断結果は軽い結核。幼稚園を続けることは叶いませんでした。母と一緒に最後に幼稚園の先生に挨拶に行ったことも覚えていますが、特に寂しかったという記憶はありません。しかし家での生活が中心となると待つていたものは「退屈」と付き合うことでした。もともと外向的な私はひとりですじくりというより、友だちと外でいることのほうが好きでしたから、時間を持って余し退屈している私をみた母は月刊誌の「小学一年生」をとってくれるようになりまし。それが届く日、十一時に近所の文房具屋さんに配達されるのですが、何回も何回もその店先にのぞきに行きました。それ程心待ちにしていたのです。幼稚園ではキンダーブックを購読していましたが、「小学一年生」はそれに比べると厚く、読みでもあり、次の月に次の号が出るまでの間繰り返し繰り返し読み、内容はほとんど暗記してしまうほどでした。幼稚園での生活が中断されてからの私の生活はこうして「退屈」と「本を繰り返し読む楽しさ」「本を待つ楽しさ」に彩ら

れていきます（これを彩りといつてよいとすればの話ですが）。それと今から思うと「白昼夢」とでもいふべき

想像の世界にはまっていたようにも思います。何しろ近所の友だちはみんな少なくとも午前中は幼稚園に行つてしまつているのですから、ひとりで何とかしなくてはなりません。家には四歳半違いの妹がいましたが、同年齢の友だちの代わりにはなり得ません。

そんな状況でしたが、それが後の私の育ちにとつて、ずつと幼稚園に行つていたのとは違う影響を与えたように思います。もともと外向的な方で、幼稚園に行つたことでそこにより拍車がかつたのですが、中退という事態は、外向性に一時的にストップをかけ、むしろ影に隠れていた内向性が顕在化して、自分なりの核を「退屈」を滋養として育てていったように思うのです。

そんな生活が日常になった頃、あの「ピンクのゴム毬」はペコペコに凹んでしまつたのです。

幼稚園児であること、幼稚園児でないこと

このように私の幼稚園時代は約一学期と短いものでした。ここで開きかけた心の蓄は、幼稚園中退という事態でいったんその動きを止めます。しかしその退屈を伴つた内向があつたからこそ、それがいわゆる「溜め」の部分となつて、後にくる小学校生活の出發がより鮮烈でなんでも珍しくあるのは吸収のみという生活を導いたように感ずることがあります。

もともと一年保育でしたから、幼稚園に行く心の準備は万端でした。さらに幸か不幸か病氣中退ということが結果として小学校生活に向けて内なる心を耕す時間を保証することとなりました。

今思うと「待ち」や「溜め」のやたらと多かつた幼児期ですが、私にとってはこの二つが今現在、幼稚園の意味を考へる原点になつて思うように思うのです。

（鎌倉女子大学・同幼稚園部）